| | |
|---|---|
| 氏名（本籍） | 村井　文江 |
| 学位の種類 | 博士（ヒューマン・ケア科学） |
| 学位記番号 | 博甲第　7469　号 |
| 学位授与年月 | 平成　27　年　3　月　25　日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当 |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 |
| 学位論文題目 | 家庭における性教育を支援するプログラム開発と評価 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学教授 | 教育学博士 | 徳田克己 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 医学博士 | 斎藤　環 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 博士（医学） | 江守　陽子 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 博士（医学） | 高田ゆり子 |

# 論文の内容の要旨

（目的）

本研究の目的は、思春期の性の健康を促進するために、家庭における性教育を充実させる必要性から、親による性教育を支援するためのプログラムを開発し、評価してそのプログラムの有用性と今後の展開について検討することにあった。以下、(1)ニーズ調査、(2)プログラムの開発、(3)プログラム実施後のプログラム評価について述べる。

（対象と方法）

研究フィールドであるＡ市の、思春期の子どもを持つ親に対して、家庭において子どもに性教育をすることの親のニーズを明らかにする目的で、小学校 3 年生の親 1,055 名と中学校 2 年生の親 1,076 名を対象に、無記名自記式質問紙法によるニーズ調査を実施した。質問紙は、①家庭における性教育の実施状況、②性教育支援講座へのニーズ、③性教育支援講座への参加希望および性教育の実施に影響する要因、④回答者の属性、から構成した。

また、プログラム評価については、小学校 16 校に在籍する 3 年生 723 名の親を対象に、「性教育支援プログラム」を実施し、無記名自記式質問紙による事前事後テストデザインにより実施した。評価時期は、介入前、介入直後、介入 1 か月後とした。

評価項目は性教育スキルの自信、性教育をする自信、思春期の養育行動、子育ての自信、性教育の実施者割合である。性教育スキルの自信は自作の尺度であることから、因子分析によって構成概念妥当性を確認した。思春期の養育行動は養育スキル尺度を、性教育をする自信および子育ての自信は VAS（Visual Analog Scale）を使用した。介入群と対照群における評価変数の比較は、２元配置分散分析

を行った。性教育の自信と性教育の実施の関連については、多重ロジスティック回帰分析を行った。

（結果）

ニーズ調査の結果については、636 名（43.5%）から回答が得られ、そのうちの有効回答 627 名を分析した結果、性教育講座への参加希望は、71.3%であった。家庭においてこれまでに性教育を実施している親は 32.6%であったのに対し、実施してはいないが必要と考えている親は 85.4%であった。また、性教育支援講座への参加ニーズを高める要因は、家庭での性教育の必要性を認識している（*OR*=6.141、*95%CI* [3.617 ,10.427]）、子どもの性について心配がある（*OR* = 3.526、*95%CI* [1.813 , 6.790]）であった。

プログラムの内容については、“思春期の子どもへの関わり方”、“思春期の子どもの関心・意識・行動の現状”、“思春期の子どもの体と心の成長・発達”について知りたいとの希望が多かった。

文献検討とニーズ調査の結果を元に、ロジックモデルの“if - then”の仮定に基づいてプログラムを作成した。プログラム内容は、親が子どもに対して性教育をすることに自信を高め、実践が促されることを目的とし、ポピュレーションアプローチ型で計画した。1回 80 分で、子どもたちを対象にした「いのちの誕生」への授業参観 40 分、親を対象にした講座「家庭における性教育」40 分の 2 部構成とした。「いのちの誕生」への授業参観は、親が子どもの受けている性教育を知ることで性教育の必要性を認識し、自ら開始するきっかけになることを意図した。

プログラム評価の結果については、介入群 181 名と対照群 71 名について分析した結果、性教育スキルの自信について介入群は介入１か月後に有意に得点が高くなっていた（$F(1、500)=4.249$、$p<.001$）。性教育をする自信は介入群において、介入１か月後に得点が有意に高くなっていた（$Z=-8.213$、$p<.001$）。思春期の養育スキルは介入前－介入１か月後と、介入群－対照群のどちらも有意差は認められなかった。子育ての自信は、介入群が介入１か月後に得点が有意に高く（$Z=-3.441$、$p=.001$）、かつ、対照群と比較しても有意に得点が高かった（$U=7090.5$、$p=.009$）。

性教育に関する自信を促進する要因としては、制御体験、代理体験、言語的説得、行動の方略、行動に対する意味づけ、生理学的情動的状態が体験されていた。性教育の実施は介入前 16.6%に対して、介入１か月後では 74.9%であった。介入後１か月間の性教育の実施に対して、介入直後の性教育をする自信の影響が認められた（*OR* = 2.152、*95%CI* [1.049 , 4.416]）。

（考察）

以上のことから、本プログラムは、思春期前期にある子どもを持つ親が性教育をすることを支援するプログラムとして有用であることが示された。しかし、性教育の実施に影響する要因は、性教育をする自信だけでは説明しきれず、動機づけ、必要性の認識、子どもとの相互作用が推察された。今後、親が性教育を実施するに至る過程を明らかにした上で、さらにロジックモデルを検討し、より有用なプログラムにしていくことが必要である。

家庭における性教育を充実させる必要性から親が性教育に自信を高め、性教育をすることを支援するためのプログラム開発とその評価を行った。本研究で開発されたプログラムは、小学校 3 年生の親に対して、家庭での性教育の自信を高め、性教育を促進するためのプログラムとして有用であることが示された。今後は、思春期の子どもたちの性の健康を促進するような中期的アウトカム、長期的アウトカム

の評価にも耐えうるプログラムを開発する必要がある。

## 審査の結果の要旨

（批評）

本研究における思春期前期の子どもを持つ親に対する性教育支援プログラムは、セルフ・エフィカシーモデルに基づいたロジックモデルに従って開発されたものである。本研究は親の性教育に対するニーズを明確にした上で、地域の教育行政を巻き込み、事前調査・プログラムの立案・実行・評価・提言を行うなど、単に机上の研究にとどまらず、自ら実践し、このプログラムに基づく支援によって親の性教育に関する自信を高める効果があること、介入直後の性教育をする自信によってその後１か月間の性教育の実施を促進していることを実証した。これらの一連の過程は研究者としての情熱と努力とち密な計算に支えられており、そのオリジナリティは高く評価できる。

以上、研究の意義、オリジナリティ、研究成果、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成 27 年 1 月 7 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。